



今月の主な目次

- 「ホクセイ」「ホクエイ」を利用した牧草品種混播例(晩秋の草地管理のポイント)
- 寒冷期における乳牛飼養管理のポイント
- 北見編・スノーラクトール・アクレモのコントラクター利用レポート
- 豊富編・粗飼料を基盤に
- 帯広編・畜舎環境衛生用資材エスカリウのユーザー訪問

時の話題

よそ事ではなくなった、「牛海綿状脳症(BSE)」

九月一〇日、疑似患者発生が公表され、九月二日、英国獣医研究所の検査結果に基づき、我が国における、「牛海綿状脳症」の初発生が発表された。

発生原因は、「肉骨粉等、反すう獣に由来する飼料」の給与とされ、全国の乳牛・肉牛飼養単位(農家・企業・団体)について、家畜にその病兆がないか、それらのエサが給与されていないか等、立ち入り検査を受けました。また、配合飼料製造工場ではそれらが原料として使われていないか、製造工程を含め検査を受けました。

九月一八日には、上記飼料の牛への使用禁止に関する法的措置の実施が発表され、同日より施行され、原因と思われる部分が封鎖されました。冷静な対応が求められています

昨年の口蹄疫と比較し、問題がやや大きいのは、人間も【プリオン病】として、影響を受けるからです。但し、この場合も、影響を与える部位と、そうでない部位とがあり、日本人は影響を受けない部位を食しており、心配が少ないとされています。また、発症するには、相当量の【異常プリオン】の蓄積が前提になるとされ、日本人の牛肉消費量は、欧米人と比較し微々たるものであり、そ

の両面から、心配は少ないと言われております。風評被害を受けるのは誰か?

酪農・畜産農家の方々は、すでに多面的な被害を受けており、これが長引けば心配です。次いで、食肉・およびその加工・流通関係、そして飼料会社も影響を受けています。

食肉については、今後、屠畜場でのBSE検査の実施や、屠体方法の改善がなされ、安全が確認されたもののみが流通することになり、その意味では、国産牛の安全性がより保証されたものになり、安心して食べていただけたらと思います。長い目でみて改善しなければならぬこと

①酪農・畜産は、物質循環では優れた農業であり、健全牛については、問題のない非食用部分の無駄のない活用を取り戻すことが必要です。

②BSE汚染国は、今後、東南アジアや低開発国へ広がると予測され、食肉及び肉骨粉の輸入先も狭められ、再発或いは被害の拡大リスクがつかまといえます。従って、国内生産をより確実なものとするよう、見直しが必要です。

③国内の耕地利用率が低下し、輸入穀物、輸入畜産物への依存が高まっています。昨年の口蹄疫では、輸入粗飼料や輸入敷料が疑われました。今回の、BSE患者の発生では、輸入肉骨粉類が疑われています。国産飼料資源の生産拡大と利用の拡大が大切です。

(北海道研究農場長 山下 太郎)